

大阪体育学会第52回大会 シンポジウム

## 日本女性にみる武道文化の伝承と生涯学習について

A study of the transmission of Budo culture and Lifelong study from  
the viewpoint of Japanese women

福田 啓子\*

Keiko Fukuda

永松 女性のスポーツ。武道ということなんですけども、福田先生、よろしくお願ひ致します。

福田 先生方、初めまして、福田啓子と申します。先ほどの高橋先生のお話をお伺いしているうちに、私も長くなぎなたをやってきた理由を考える過程で、なぎなたの歴史研究に取り組みました。大学進学を父親に願いましたら、剣道を嗜んでいた父親は「なぎなたをしなさい」と言い、それが条件で奈良女子大学の入学を許可されました。この年齢ですから、四国から遠路はるばるやってきて、文学部の歴史に入学したのですが、父の条件であるなぎなたは入学以来ずっと続けました。それから大学院を卒業し、結婚後も、ずっと家庭を顧みず、子育てをしつつなぎなたを続けていたんですけど、50歳代になったときにふと、なぜ自分は奈良女子大に入学してなぎなたを続けてきたんだろう。父は何を言いたかったんだろう、長く続けていくってどういうことだろう。まさに、お題を頂いた、スポーツジェロントロジーという立場から自分のなぎなたをふり返って研究をした次第です。

なぎなたというと、野球やスイミングと比べて非常にマイナーですので、ご存じのない先生方も多くいらっしゃると思います。少しだけ紹介をさせていただきます。これはなぎなたの用具です(図1)。これは、650～850グラムの重

さです。現在、使っているなぎなたで竹の2枚刃、剣道の竹刀から工夫して作られたものです。戦後使用しているなぎなたは、非力な女子に合わせて作られました。これは防具というのですが、なぎなたの操作方法はバリエーションが多く、長物ですので形(かた)をたくさんします。試合もするのですが、防具は小手に指がありすね当てを装着するという特徴がございます。

- ・ 大阪体育学会第52回大会 シンポジウム
- ・ テーマ「いのちが輝く生涯スポーツ」2014.3.16
- ・ 於 近畿大学
- ・ 発表者 なぎなた 福田啓子



図1

これは、全国に13本あり、届け出のある真剣のなぎなたです。奈良国立博物館に談山神社が所有するところの真剣のなぎなたで、実際持ってみますと非常に重くて、私も持つことが大変でした。3キロ以上あるかと思われます。

鎌倉時代にはたくさんのなぎなたが作られて

\* 奈良県なぎなた連盟理事長

おりました。全て真剣の素晴らしいなぎなたで、戦国時代、南北朝時代までは合戦用で、主戦兵器として使われました。鉄砲が伝来して、槍が使われるようになるとなぎなたは廃れていきます。その後は、僧兵とか女子が、防御の武器として使うようになりました。今回のスポーツジェロントロジーの視点から、4項目で書いてみました(図2)。これが明治の初期ですね。直心影流の宗家 園部英雄氏で女性です。93歳です。91歳のときにテレビに出られて、真剣のなぎなたを持たれています。この方は子どものときに故郷の宮城県に撃剣興行が巡業してきました。それに憧れて、親の反対を押し切って全国を巡業して、そしてなぎなたの指導者に就いた、まさに本当に93歳で亡くなるまで一生なぎなたをし続けられた偉大な先駆者です(図3)。

何百年もの歴史を持ったなぎなたが、なぜ今女子が多いのか。公式に武道は9種目ありますが、なぎなただけが女子が多く90パーセントぐらい女子がやっています。その基になったのは、日清、日露戦争が終わった後、明治後半期ですけれども、日清戦争を勝利をして、日本が武術を見直したということで、剣術は男子にということになると、女子はどうしたものかということ、先ほどの園部秀雄氏とか、それから

美田村千代氏という天道流の宗家方が女子でなぎなたで活躍されていたことから、女子の体操になぎなたが実現した次第です(図4)。

「スポーツジェロントロジー」の視点から  
日本の伝統文化であるなぎなたの歴史をみる

1. 戦前の女子教育に採択された薙刀の歴史
2. 戦後スポーツ競技として再生したなぎなた
3. 伝統文化としての武道なぎなた発展の道
4. 今後の課題とは、ヘルススポーツ・レジャー  
スポーツ・マスターズスポーツの観点から

図2

薙刀先駆者 園部秀雄(1870-1963)



- **1期(1870-1896)撃剣会時代**
- 佐竹夫妻との出会い 薙刀の継承流派 柳剛流
- **2期(1896-1920)光武館時代**
- 武徳祭への出場
- 門人としての新井との関わり
- 流派の名乗り 直心影流
- (3章2項)第9回青年演武会明治40年8月に初めて名乗る
- **3期(1920-1945)**
- 学校薙刀の指導者として
- 姫路師範学校、成蹊女学校、実践高等女学校、修徳館の開校

図3

文部省の法令により 女子に適する課外運動  
として位置付けられた薙刀

- 明治43(1910)年5月20日全国師範学校長会議 六項目の諮問
- 同年7月9日付答申 女子に適当な課外の運動 薙刀・弓術・氷滑り・水泳・庭球
- 文部省通牒 **奈良女子高等師範学校に課外必修として薙刀採用**  
「省普二十七号」
- 明治45(1912)年6月師範学校規程 撃剣・柔術が正課に加えられる

大正2(1913)年1月28日学校体操教授要目  
(日本最初)

撃剣・柔術は正課になり、薙刀は時間外に  
女子の行う運動として明記された

大正15(1926)年5月27日改正学校体操教授要目  
撃剣・柔術が剣道・柔道に改められた!

図4

これが前身の奈良女子高等師範学校なのですが、東京にすでに設置されていたお茶の水高等師範学校と女子高等師範学校が日本に二校ありましたが、お茶の水はダンスが体操の重要種目になっていました。ところが奈良女子高等師範学校は、教師になるならということで、校長が剣道をやっておりましたので、女子になぎなたをさせようということになりました。朝早く、授業に差しつかえないように放課後とか、それでも1年生、2年生は必修としてなぎなたをやりました。この教育方針は、明治44年に学校が設立されてその1年後にすぐ立ち上げておりますので、女子は良妻賢母の教育をなぎなたで行うというので実施されました(図5)。

この明治初期に奈良女子高等師範学校、それから同志社で三田村千代の父美田村顕教という先生が剣道部で。そして園部秀雄先生が東京にある成蹊女学校、実践高等女学校で大正期に非常に盛んになってまいります。今行われているような基本、形や試合いろんな段階の教習法が、学校で一切教えるものですから。武道は大体個別で、道場で教えるという形だったんですが。学校という場で集団、一斉指導というのが取り入れられております(図6)。

昭和になってまいりますと戦争期に入りまして、昭和の10年代のときには、非常に取り上

げてるんですが、なぎなたもここに入っています。弓道、なぎなたやバスケット、スキーなどが、女子にふさわしいと見なされております。(図7)

### 奈良女子高等師範学校における 薙刀教育の特徴

<ul style="list-style-type: none"> <li>教育方針→『婦徳の養成』</li> <li>教育の4つの柱 訓育・寄宿寮・学業・体育</li> <li>学校の使命→女子教員養成</li> <li>薙刀授業→体操の教材</li> <li>薙刀教授状況の提示 団体教授 (振り形)操作法 一週間一回1時間</li> <li>個人教授 (形20本)習熟度別 一週間一回30分各人2・3分</li> </ul>	<p>薙刀→心身鍛錬の目的</p> 
--	--

図5

### 明治・大正期に実施された薙刀教育

<ul style="list-style-type: none"> <li>奈良女高師→団体教授 個人教授「形」 明治44(1911)年から</li> <li>同志社女学校→共同練習 明治33(1899)年から</li> <li>成蹊女学校・実践高等女学校 大正7(1918)年から</li> <li>「学校薙刀道」(1936) →4段階教習法 基本・形・地稽古・試合</li> </ul>	<p>新井つた(鏡心流)</p> <p>美田村顯教(天道流)</p> <p>園部秀雄(直心影流)</p>
--	--

図6

## 女子体育展覧会

昭和13年11月13日~23日 女子体育振興会主催  
文部省・厚生省・東京朝日新聞社後援



図7

図8は京都の榊田八重子氏です。榊田氏は、流派ごとになぎなたを教えるのは、学校教材として教えにくいということで、全国を回って実態調査をしまして、統一形を作成しました。これ、剣道に合わせてということですけど。もちろん柔道は加納治五郎先生が居られて、非常に一番先頭で武術の中では新しい教育がされていたのですが。戦後、GHQの勧告により武道教育が廃止され、昭和30年にやっと全日本なぎなた連盟が発足します。これまで、なぎなたは剣道組織の一部として所属しておりましたけれども、初めて独立します。そして、なぎなたは昭和

34年に高等学校の特別課外クラブとして行うことが認められます(図9)。

新しいなぎなたの特徴で、一番違うところは戦前は太刀対なぎなたで、異種の武器に対しての使うなぎなたでありました。なぎなたが長いので、なぎなたを真つ二つに折られたり、蹴られたりしますと、短刀、懐剣で戦っておりましたけれども、戦後ですね、なぎなた対なぎなたということで、これがスポーツ化したといわれている所以です(図10)。国体は私が選手として出場しました。その頃は選手生活ばかりやって、優勝に加わったのですが。なぎなたは昭和



文部省体育調査委員  
「榊田八重子」の努力

文部省に上申書提出

- ☆ 薙刀指導教材の統一
- ☆ 薙刀対薙刀を武技として制定

全国の薙刀の実態調査  
各流派(天道流・直心影流等)の研究

統一形の作成

図8

戦後「新しいなぎなた」  
としての再生

- 昭和30(1955)年5月4日  
全日本なぎなた連盟の発足
- 「なぎなたの正しい指導により、技を練り、心を磨き、... 平和な社会に役立つ人を養う」(全日本なぎなた連盟指導方針)
- 昭和34(1959)年12月23日  
なぎなたは特別活動(クラブ活動・学校行事)でおこなうことが認められた
- 「学校におけるなぎなたの実施について」(文部省 文体体226号)

図9

「新しいなぎなた」の特徴

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 左右対称に行われる均斉のとれた全身運動</li> <li>◆ 正しい姿勢と正確な動作を養う</li> <li>◆ 自己統制力を養う</li> <li>◆ 空間に対する知覚感覚を高め瞬間に起こる変化に処する能力を養う</li> <li>◆ 品位のある優美な態度を養う</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 操法に変化があり面白い(くり出し・くり込み・もちかえ・振り返し)</li> <li>◆ 対人はもとより、個人でも集団でも楽しめる</li> <li>◆ 格技形式の「スポーツ」の一つで非力な女子の運動としてふさわしい</li> <li>◆ 伝統ある日本古来の競技である</li> </ul> <p>『なぎなたの道』徳永千代子、2003<br/>『新しいなぎなた』体育の科学社、1960</p> |
|--|--|

図10



和59年よりあかぎ国体から参加となります(図11)。

もう一つなぎなたには、剣道と違って試合だけではありませんので、そういう形とか操作を教材として、リズムなぎなたというのをしていますね。音楽に合わせてなぎなたの技を皆さんに披露するということが行われています。これは教育の場とか、なぎなたの技をみんなに見せて、楽しく仲間で行うという動作です。私が授業を務める大学の授業ですが、リズムなぎなたは生徒に好評です。仲間作りとか、勝ち負けだけを決めないという、新しい動きだと思います(図12)。これは、大阪の矢野恒先生の指導のもと大阪体育大学なぎなた部が神戸のユニバーシアードで実演された様子です(図13)。

第28回全日本なぎなた選手権大会  
第24回都道府県対抗なぎなた大会  
第39回国国民体育大会リハーサル大会 奈良・川西町開催



図11

### 1985神戸ユニバシアードに於ける リズムなぎなたの公開演武

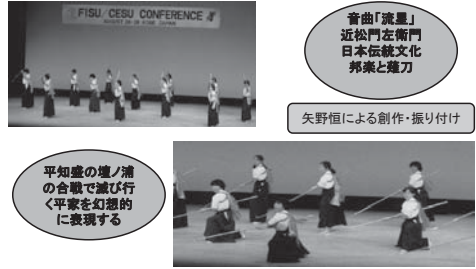


図13

これがエイジングですね。平成10年から開始された大会です。当時、40歳代から80歳代まで、80歳代の試合を私たち40歳代が、審査させて頂いて本当に感動した覚えがあります。80代の方が、これはちょっと40代、50代の方。40歳以上の方を出そうということで、40代、50代、60代、70代、80代の試合をしました。大変楽しかったのですが、国体など競技主流となり、高齢者の方に参加者が少なくなって閉会となりました。今回、先生方のご講演を拝聴しこの大会をもう一度やらなければならないというふうに考えております。3年前に大会がなくなりました(図14)。

それから2011年に姫路の武道館で世界11カ国の国が参加され、世界大会開催されました(図15)。ここで世界各国が旗を持ちまして(左上写

### 戦前・戦後の公開演武「リズムなぎなた」



図12

### 平成10年エンジョイ大会開始



図 14

### 関西学生なぎなた新人戦大会



関西学生なぎなた新人戦大会は、会長岡本ナヲ子氏（昭氏の母上）・副会長山尾陽子範士を柱とする近畿学生なぎなた連盟が主催し第一回が、昭和61年に開始された。大阪体育大学（矢野・船原）神戸松蔭女子大学（浦部）奈良女子大学（藤原・福田）関西大学、武庫川女子大学を主として構成されており、1、2年生主体の大会に普及と広く知ってもらうため、第11回大会（平成7年10月）より公開競技としてリズム大会を取り入れた。審査員5名が採点式で10点を最高点とし1～3位を表彰する



図 16

### 第五回世界なぎなた選手権大会

2011.7.3 日本・兵庫県立体育館



図 15

スポーツジェロントロジーの視点から  
観た「なぎなた」に関する今後の課題



図 17

真)。右上写真が演技競技ですね。指定された3本の形を、旗形式で5人の審判が判定します。赤と白の旗を上げて勝敗を決める競技になります。これは試合競技と言っていますが、3分間3本勝負です（右下写真）。これはリズムなぎなたです（左下写真）。これは、関西学生なぎなた新人戦大会です。マイナーな競技ですが、学生生活を有意義に、身体を鍛え、心を磨こうと、大学の競技としてOGと学生さんが協力して開催しています（図16）。

最後に、今回のテーマについてまとめますと（図17）、ヘルススポーツは、健康増進、体力向上です。私ももう60代を過ぎてるんですけど大きな病気はしたことないです。お産で病院行っただけです。そして寒稽古も裸足でやっております。大学の授業でなぎなたを教えておまして、5講座ありますから約140人の学生に、教えています。レジャースポーツは、余暇の充

実、仲間との交流、これをもう少し立ち上げていき、マスタースポーツは、技の上達、称号・段への挑戦、それから競技では、具体的に勝ち負けとか、世界選手権の中で勝ちたいとか。こうなってくると、先ほどのエンジョイ大会の人たちではなく、やはり20代、大学を卒業したすぐの人たちとや高校生を主眼に置いてしまい、どうしても40代、50代、60代の方たちに光をあてて、もう少し生涯を通して楽しいなぎなたをしていかねばならないという思いが今回致しました。本当に高橋先生とか、お話をお聞きして深く反省しております。

永松 どうもありがとうございました。時間が押しおまして15分ということでお話をさせていただきたいということを再三お弁当食べながら言いましたので、皆さん時間を厳守していただきまして、ありがとうございました。